

# 豊岡盆地の水辺の鳥

2002年6月  
コウノトリ市民研究所研究員  
高橋 信

但馬の穀倉地帯とも言うべき広大な六方田んぼを抱える豊岡盆地。盆地を囲む緑豊かな山々、その中央を悠然と流れる円山川、盆地の中心部からおよそ15 Km下流で日本海に注ぐ地形が、四季を通して多くの野鳥たちを育み続けている。

本報告は、私が本格的な野鳥観察を始めてわずか3年という短い期間での知見であり、長期観察による当地の野鳥の生態を明らかにしたものではありません。ことをお断りした上で、豊岡盆地における水辺の鳥に関し最近の事情をダイジェスト的に紹介する。

なお、本稿ではいわゆる水鳥と呼ばれる範疇に限定せず、豊岡盆地の水辺を生活の一部として利用する鳥に関しても言及する。

## 1. カモ類の越冬地としての水辺

10月になると、カモ類の先陣を切って**コガモ**の一群がやってくる。渡りの初期に観察するのはメスだけの集団であることが多い。秋の気配が濃くなる頃、オスも含めたおなじみの顔ぶれがそろそろ。私のホームフィールドは円山川支流で六方田んぼの東端を南北に流れる六方川の流域であるが、ここでは**コガモ**、**ヒドリガモ**、**マガモ**、**カルガモ**を春までの間よく観察できる。**カルガモ**は少数が留鳥として暮らしている。



写真1：トモエガモ（出石川,2002/2/16）

円山川本流では、上記のカモに加え汽水域を好むカモも観察される。**オナガガモ**、**ホシハジロ**、**キンクロハジロ**などがそうである。主要支流である出石川の、円山川合流点からおよそ5 Km上流までの区間は、特に多くのカモ類が集まる流域として知られている。**ヨシガモ**、**ハシビロガモ**、**トモエガモ**、**オシドリ**といったオスの姿が美しいカモも観察できる。**カワアイサ**を初めて観察したのもここであり、冬の水鳥観察には楽しみな場所である。



写真2：カムムリカイツブリ（六方川,2000/7/29）

**カイツブリ**は円山川水系で年間を通して普通に見られる。冬鳥である**カンムリカイツブリ**は主に円山川河口域で多く観察されるが、円山大橋上流あたりまで遡上が見られる。特筆すべき記録として、2000年7月末から8月にかけて六方川中流で観察した**カンムリカイツブリ**があげられる。1999年夏にも一時姿を見ており、同じ個体の可能性もある。2000年に観察した個体(写真2)は左の翼を著しく傷めており、渡去できずに居留したものであろう。

その他の水鳥として、クイナの仲間である**バン**は円山川水系で留鳥として生息し、冬季は円山川本流を中心に**オオバン**の越冬個体が観察される。

## 2. マガンの飛来地としての六方田んぼ

かつての六方田んぼは、個体数はわずかであるが**マガン**の越冬が観察された。**ヒシクイ**の渡来記録も残っている。六方田んぼの整備が進んだここ20年ほどは、鳥取県中海・島根県宍道湖周辺の越冬個体と思われる**マガン**が、渡りの途中にまれに立ち寄る程度であったが、最近になって2000年に1羽、2001年に4羽の個体を10月初旬の六方田んぼで2年連続で確認している。



写真3：マガン（六方田んぼ,2001/10/8）

兵庫県レッドデータE Xランクにリストされた**マガン**が再び六方田んぼに降り立つようになったことは、我々に希望を与えてくれる。コウノトリ野生復帰プロジェクトが推進される中、野生の**マガン**の飛来が定着化し、やがて**マガン**の越冬が再び見られるようになることが、このプロジェクトの命運の一端を握っているように私は思う。

## 3. サギ類の餌場としての水辺

豊岡盆地はサギ類の格好の生活場所である。シラサギ類最大の**ダイサギ**は年間を通して観察できるが、夏場と冬場では亜種の入れ代わりがあるようだ。夏場は亜種**チュウダイサギ**、冬場は亜種**オオダイサギ**とみられるが、**ダイサギ**という範疇でみれば留鳥と考えてもよいだろう。当地の**コサギ**は、冬の間は暖地へ移動して暮らしているようである。



写真4：チュウサギ（豊岡市土淵,2002/5/18）

夏鳥としてのシラサギは、**チュウサギ**と**アマサギ**の2種を観察する。繁殖期のシラサギ類は飾り羽根が特に美しい。サギは混群で行動することが多いが、**アマサギ**は単一で群れているのをよく見かける。**アオサギ**と**ゴイサギ**も田植え後の田んぼの重要な構成員。**アオサギ**は厳冬の水辺でも見かけるが、**ゴイサギ**は冬の間は暖地へ移動するようだ。

豊岡盆地の周囲には、必然的にサギのコロニーが発生する。多くのコロニーは、何年か経つと放棄されるようである。また市街地に発生したコロニーで、地域住民の苦情にもとづき人為的に排除されたケースもある。コロニーを中心とするサギの生態に関しては、私はほとんど定量観察をしていないので多くの知識は無い。

#### 4 . 豊岡盆地のシギ・チドリ事情

大きな干潟のない但馬海岸では、シギ・チドリ自体、種類も数も多くない。冬の六方田んぼや河川の岸辺では**タシギ**の姿が比較的によく見られる。春先の田んぼでは**ケリ**の姿が早く現れる。**ケリ**は田起こしが終わるまでにいち早く雛を孵し、水が張られる前の田んぼのあちこちで雛の姿やそれを守る親鳥の姿が観察できる。**ケリ**は1988年に六方田んぼでの繁殖が初認されて以来、急速に個体数を増やしている種である。今では普通に見られるようになった。



写真5 : タゲリ (六方田んぼ, 2002/1/4)

**タゲリ**はかつての冬の六方田んぼのシンボリック的存在であり、「但馬野鳥の会」のマスコットとしても採用されている。しかし、**タゲリ**の飛来数も環境変化に伴って減少を続け、ついには六方田んぼでほとんど姿を見なくなってしまった。2001年11月、私にとっては8年ぶりぐらいになるだろうか、実に久しぶりに**タゲリ**の十数羽の群を観察した。この冬は断続的に**タゲリ**を観察することができ、今後、冬の六方田んぼの風物詩として復活を期待するところである。



写真6 : アオアシシギ (六方田んぼ, 2002/5/18)

渡り時期のごく短い期間、六方田んぼで旅鳥としてのシギ・チドリを観察できるが、その種類も数も少ない。田植えの終わった田んぼを見まわっていて、小さな群を偶然見つける程度である。2002年5月には**キアシシギ**、**タカブシギ**、**アオアシシギ**、**ムナグロ**を確認している。



写真7 : ムナグロ (六方田んぼ, 2002/1/3)

2002年1月3日、雪の六方田んぼで4羽の**ムナグロ**を確認した。図鑑によれば少数が本国で越冬するとあるが、雪の多い豊岡盆地での越冬記録は珍しい部類に入るのではなかろうか。**タゲリ**とともに、今後の動向を注目している種である。

## 5 . 猛禽類の重要な狩場

夏の間、豊岡盆地で観察できる猛禽類はトビぐらいのものである。秋になると、六方田んぼにはハヤブサの姿が目立つようになる。海岸の断崖で暮らしているハヤブサの、冬の狩場の一つが六方田んぼである。田んぼの中の電柱に止まっている姿をよく見かける。チョウゲンボウも冬の六方田んぼの人気者。数は少ないがコチョウゲンボウも少数混じる。

ノスリは冬になると山や北方から下りてくる。六方田んぼのほか、河川敷でもよく観察できる。2001年11月に円山川に渡来したケアシノスリは、ノスリの仲間でも極めて珍しい種であり、2002年4月7日終認までの間、多くの観察者の注目を独り占めにした。数年前にも越冬記録があり、今後の動向が気になる種である。ノスリたちが主な餌としているネズミなどの小動物が、豊岡盆地の河川敷には豊富であることがうかがえる。

円山川や出石川の河川敷ではハイイロチュウヒが毎年観察されるが、ほとんどの個体がメスでありオスの姿を見ることはまず無い。フクロウの仲間のコミミズクも河川敷の住人。日中でも、ひらひらと羽ばたきながら河川敷の上をパトロールするが、その姿を観察できたときは嬉しい。

ミサゴは兵庫県レッドデータAランクにリストされる希少種。円山川河口域で数個体が確認される他、中流域に入るあたりでも観察できる。また六方川周辺でも時々見かけることがある。円山川中流域のミサゴには特に注目しており、コイを捕食している場面を何度か目撃している。同じ場所でサンマを捕食するところを一度観察した。サンマが円山川を遡上するはずもなく、人が川に投棄した死んだサンマを食べたものと推測している。ミサゴは生きた魚しか食べないと思っていただけに、この観察は新しい発見であった。



写真8：チョウゲンボウ（六方田んぼ,2001/12/8）



写真9：ケアシノスリ（円山川,2001/12/15）



写真10：ミサゴ（円山川,2002/5/18）

## 6 . 円山川河川敷は渡り鳥の集いの場

豊岡市野上から赤石にかけての円山川右岸のヨシ原は、渡り鳥にとって特に重要な場所である。密生したヨシの広大な河川敷が、渡り時期の彼らの身を隠すシェルターとなる。ここでは環境省の鳥類標識調査が継続的に行われており、南と北を往復する渡り鳥たちの中継地として、重要な役割を果たしていることが明らかになってきている。

毎年お盆過ぎのツバメの「ねぐら入り」の観察場所として、このヨシ原は多くの市民に知られる存在となってきた。何千・何万という数のツバメが、渡りの前にこのヨシ原に集結してねぐらにする。

上記のヨシ原から円山川中流域にかけての河川敷では、渡り途中の夏鳥を一時期観察することができる。コムクドリ、ノゴマといった北日本で繁殖する鳥が通過してゆくが、観察の機会は極めて少ない。ノビタキも同類の旅鳥だが、この鳥は比較的容易に観察できる。ノビタキは河川敷のほか六方田んぼでも見られ、春と秋を告げる鳥として毎年同じ時期に会えるのを楽しみにしている。



写真1 1 : ノゴマ (円山川, 2001/4/22)



写真1 2 : ノビタキ (円山川, 2002/4/7)

## 7 . その他のトピックス

### コクマルガラス

2001年10月20日、暗色型の1羽を六方田んぼで確認。

### ホシムクドリ

2001年11月10日、六方田んぼの電柱の上で2羽を確認。但馬での初認記録。

### コハクチョウ

豊岡市赤石地区の水田や湿地を中心に、時々観察報告がある。いずれも短期間の滞在で、マガンと同様、西の越冬地に向う途中の立ち寄りと思われる。最近では2001年10月末に豊岡市内の円山川で6羽が確認されている。

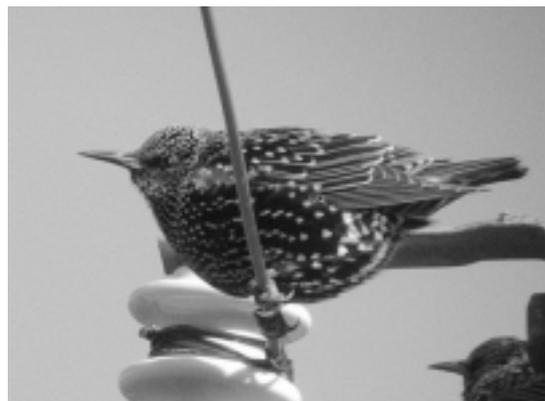


写真1 3 : ホシムクドリ (六方田んぼ, 2001/11/10)

### シロハラクイナ

1998年6月21日、六方川で最初の確認報告があったが、このときは半信半疑であった。2002年5月29日と30日の両日、円山川中流域の河岸で1羽の成鳥を観察。写真撮影に成功した。

本国では沖縄県で留鳥として観察される。近年になって生息域を北に伸ばしつつあるといわれているが、当地での記録は極めて珍しいものである。



写真14：シロハラクイナ（円山川,2002/5/30）

## 8．野鳥にとっての豊岡盆地の水辺の重要性について

今まで述べてきた通り、豊岡盆地の水辺は多くの野鳥にとって重要な生活空間を与えている。農業の省力化やモータリゼーションの発達にともない、六方田んぼの生態系は大きく変化を遂げたように見える。しかし、一旦は姿を見せなくなった**マガン**や**タゲリ**が、六方田んぼで再び観察できるようになった事実は、六方田んぼの自然の底力を感じさせてくれる。今後、水田の冬季灌水が広がりを見せてゆく中で、**マガン**や**コハクチョウ**が越冬できる豊岡盆地の水辺環境の改善を期待したい。

**ケアシノスリ**の渡来に始まった昨冬の円山川水系の猛禽シーンも、河川の豊かさの復活を示唆しているようだ。**ノスリ**の数が例年になく多い冬であった。また、円山川中流域に**ミサゴ**が定住するようになったことも、魚類の豊富な環境がそこにあるからに違いない。

旅鳥を含めた渡り鳥たちにとって、豊岡盆地の水辺は昔も今もその重要性を失ってはいない。日本海から思いもよらない鳥が豊岡盆地に迷い込んでくることも、この土地に何かしら彼らを呼び込む魅力があるからであろう。

3年間で私が豊岡盆地で観察した野鳥は100種を越える。但馬全域では毎年およそ180種の野鳥が観察されるが、その6割の種を育む豊岡盆地の自然は、たしかに豊かであると言ってよいだろう。この自然をさらに豊かなものにするために、人々が少しずつ積み重ねる努力こそが、コウノトリ野生復帰プロジェクトの本質ではないかと私は思っている。

（完）

### 参考文献

- (1)「但馬の自然」 兵庫県生物学会但馬支部編 神戸新聞総合出版センター(1990年)
- (2)「但馬野鳥の会会誌 Lapwing」Vol.1(1982年)

付 録

豊岡盆地で観察した野鳥リスト111種(1999年~2002年)

注：豊岡盆地を囲む山で観察した鳥も含む

カイツブリ目カイツブリ科 (2)

カイツブリ、カンムリカイツブリ

ペリカン目ウ科 (1)

カワウ

コウノトリ目サギ科 (6)

ゴイサギ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギ

カモ目カモ科 (13)

マガン、オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、トモエガモ、ヨシガモ、  
ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、  
カワアイサ

タカ目タカ科 (5)

ミサゴ、トビ、ケアシノスリ、ノスリ、ハイイロチュウヒ

タカ目ハヤブサ科 (3)

ハヤブサ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウ

キジ目キジ科(1)

キジ

ツル目クイナ科 (3)

シロハラクイナ、バン、オオバン

チドリ目チドリ科 (5)

コチドリ、イカルチドリ、ムナグロ、ケリ、タゲリ

チドリ目シギ科 (4)

アオアシシギ、タカブシギ、キアシシギ、タシギ

ハト目ハト科 (2)

キジバト、アオバト

カッコウ目カッコウ科 (4)

カッコウ、ホトトギス、ツツドリ、ジュウイチ

フクロウ目フクロウ科 (3)

フクロウ、アオバズク、コミミズク

ブッポウソウ目カワセミ科 (2)

カワセミ、ヤマセミ

キツキ目キツキ科 (3)

アカゲラ、アオゲラ、コゲラ

スズメ目ヒバリ科 (1)

ヒバリ

スズメ目ツバメ科 (3)

ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ

スズメ目セキレイ科 (4)

キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、タヒバリ

スズメ目サンショウクイ科 (1)

サンショウクイ

スズメ目ヒヨドリ科 (1)  
ヒヨドリ

スズメ目モズ科 (1)  
モズ

スズメ目ツグミ科 (8)  
ノゴマ、ジョウビタキ、ノビタキ、イソヒヨドリ、トラツグミ、クロツグミ、シロハラ、ツグミ

スズメ目ウグイス科 (6)  
ヤブサメ、ウグイス、コヨシキリ、オオヨシキリ、センダイムシクイ、セッカ

スズメ目ヒタキ科 (3)  
キビタキ、オオルリ、コサメビタキ

スズメ目カササギヒタキ科 (1)  
サンコウチョウ

スズメ目エナガ科 (1)  
エナガ

スズメ目シジュウカラ科 (4)  
コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ

スズメ目メジロ科 (1)  
メジロ

スズメ目ホオジロ科 (5)  
ホオジロ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、アオジ、オオジュリン

スズメ目アトリ科 (5)  
アトリ、カワラヒワ、ウソ、イカル、シメ

スズメ目ハタオリドリ科 (1)  
スズメ

スズメ目ムクドリ科 (3)  
コムクドリ、ホシムクドリ、ムクドリ

スズメ目カラス科 (5)  
カケス、コクマルガラス、ミヤマガラス、ハシボソガラス、ハシブトガラス